

(追悼文)

二度の握手 – 野村先生との思い出 –

日本医科大学化学教室

中村成夫

私が野村先生に初めてお会いしたのは、東日本大震災直後の2011年4月のことであった。化学教室の教授として日本医科大学に着任した私は、辞令交付式の席で少し離れたところに座っている方が、同じタイミングで基礎科学主任（当時は新丸子主任）の辞令を受けた野村先生だと知った。式の後、先生はすぐに私のところに来てくださり、「先生、よろしくお願いしますね。いやあ、課題山積ですよ」と握手を求めてこられた。一瞬で「あっ、この人は信頼できる」と感じた温かい手だった。これが野村先生との一度目の握手であった。

一人の知り合いもない日本医科大学に赴任した私は、最初はそれなりに不安であった。そんな私に野村先生は何くれとなく気を遣ってくださった。私が一人で実験ができるように研究環境整備の便宜をはかってくださったのは、大変ありがたかった。その後も基礎医学の先生と共同研究ができるよう取り計らってくださった。これは私の研究にとって大変貴重な財産となった。もっともこれは私一人のためというわけではなく、基礎科学と基礎医学・臨床医学をつなぐことによって、基礎科学の若い研究者たちに活躍の場を与えようという野村先生の親心であった。

野村先生の最初の大仕事は2014年の新丸子校舎から武蔵境校舎への基礎科学の移転であったと思う。基礎科学の教員は医療心理学・数学・物理学・化学・生物学・外国語・スポーツ科学と幅広い分野にわたっており、各研究室が不公平感を持たないように調整するのはさぞかし大変だったと思う。大局的な判断を持って、誰からも文句が出ないような研究室配置を設計されたのは、さすが野村先生だった。

もうひとつの大仕事は武蔵境移転と同時に行われたカリキュラム改訂だろう。これには私も少しは貢献したと自負している。小澤教務部長、野村基礎科学主任と3人で、2014年入学の1年生からスタートする新カリキュラムの策定のため

に何度も何度も話し合った。基礎医学との調整は小澤先生の知恵と力を借り、基礎科学内の調整は野村先生の知恵と力を借り、着々と新カリキュラムができあがっていくのを目の当たりにして、信頼できる人と一緒に仕事をするのはなんて楽しいだろうと感動を覚えた。そして尊敬できる人のためなら一生懸命働けることも身をもって感じた。

このように何度も相談したり話し合ったり、他にも拘束時間の長い委員会の委員と一緒にやったりしたおかげで、野村先生にはずいぶん親しくしていただいた。私もちょっとした相談事があれば、しばしば野村先生の教授室を訪れるようになった。野村先生のお部屋にはいつもクラシック音楽が流れていた。私もクラシックが好きなので、ついでに音楽の話をしてしまうこともしばしばだった。「珍しくワーグナーですね。どうされたんですか?」「うん、ちょっと自分を鼓舞しようと思ってね」とか「あれ、こないだ伺ったときもブラームスの1番がかかってませんでした?」「なんか疲れてるのか、CD取り換えるのがめんどくさくてそのまま何度もかけてるんだよ」などの他愛のない会話が懐かしく思い出される。私が野村先生の真似をしていることはいくつもあるが、そのうちのひとつが仕事をしながらクラシックを流すことだ。他には、千駄木での会議の帰りに小澤先生の教授室に立ち寄ってコーヒーをご馳走になりながらおしゃべりをするというの、野村先生の真似をさせてもらった。

こんな日々がいつまでも続くような気がしていたが、野村先生の定年の日が近づいてきた。最後の数年は基礎科学の諸問題を整理することを意識されていた。「後の人が困らないように、ぼくが憎まれ役になればいいんだから」と、場合によっては半ば強引に片付けていかれた。おかげさまで基礎科学主任を引き継いだ私はとてもやりやすい状態でスタートできた。後任のことも考えてくださった野村先生には感謝しかない。

東日本大震災から一ヶ月も経っていなかった2011年4月1日に基礎科学主任となられた野村先生は、COVID-19が我々の生活に暗い影を落とし始めた2020年3月31日に定年を迎えられた。自粛ムードが漂う中で、送別会もできなかった。その一週間後の2020年4月7日には、最初の緊急事態宣言が発出された。

野村先生もリタイア後の人生設計をいろいろされていたと思う。基礎科学教職員宛の退職の挨拶メールには「臨床医に戻れるのでほっとしています」とあった。まずはクリニックでしばらくのんびり診療をされるおつもりだったのだろう。教授室での他愛のない会話の中でも「老後はアヴェ・ヴェルム・コルプスでも聴き

ながら穏やかに暮らしたいねえ」とおっしゃっていた。しかし、まずはCOVID-19に予定を狂わされたようだ。7月には野村先生が在職中によく小澤先生と3人で行っていたお店でこっそり会食した。「3月末以来、大学関係者と会うのは初めてだよ」とおっしゃっていたが、近況を訊くと「コロナのせいで患者が減っちゃってねえ。経営のことにも関わらなきゃいけなくなったよ」とぼやいておられた。この日の会が先生の病が発覚する前の最後の会となった。

7月にお会いできたことに気をよくして、9月に再びお会いする計画を立てていた。野村先生も楽しみにされていたのだが、直前になって「この2～3週、急に体調不良を自覚し、付属病院消化器外科に入院することになった」との連絡をいただいた。「消化器外科」という単語に一抹の不安を覚えつつ、また元気になられたら再開（再会）しようと呑気に考えていた。数日後、千駄木での対面会議の後、大学院棟の近くを歩いていたら、路上でばったり小澤先生に出くわした。「野村先生のことわかったよ」といつになく硬い表情でおっしゃり、ひと言「pancreas……」と。目の前が真っ暗になるとはまさにこのことだった。地下鉄の車内で「何でよりによって……、何で野村先生が……」とばかり考えていたのを覚えている。

私が野村先生から基礎科学主任を引き継ぐにあたり、ひとつ決めていたことがある。それは、退任後にまであれこれ相談されるのはあまり気分のよいものではないだろうから、なるべく野村先生を頼らないということだった。とはいえ、たまには野村先生と他愛のない話をしたいし、愚痴だって聞いてもらいたい。年が明けた2021年1月のある日、意を決して「用事はないんですが、先生の声を聞きたいので電話していいですか？」とショートメッセージを送ってみた。すると「今ならいいですよ」との返事をいただいたので、いそいそと電話をかけた。今はご自宅で療養されていること、体調も落ち着いていること、食欲も回復してたまに奥様と食事に出かけたりしていること、などをお聞きした。そこで図々しくも「小澤先生と3人でランチくらいならどうでしょう？」と訊ねると「吉祥寺あたりで60～90分くらいなら」とのお返事をいただいた。大喜びで急遽小澤先生と日程調整して、ランチ会をする運びとなった。野村先生に日時をお知らせしたら、「なお、抗がん剤の副作用で禿げてしまいました。驚かれるかもしれないので、あらかじめお伝えしておきます」と、いつものユーモアもお忘れではなかった。ドキドキしながらお会いしたが、少し痩せられてはいたものの、割と量の多いランチをぺろりと平らげられて、このまま全快されるんじゃないかと錯覚して

しまいそうだった。しかし「しばらく小康状態が続くかもしれないけど、ずっとこのままってわけにはいかないからね」とおっしゃられて現実に引き戻された。

その後も何度も緊急事態宣言が延長を繰り返し、東京オリンピックとともに感染も急拡大し、なかなか連絡もできなかった9月のある日、野村先生から一冊の本が届いた。先生の著書『刑務所の精神科医 治療と刑罰のあいだで考えたこと』であった。対象者からはちょっと距離を置きつつ、でも優しくて温かみのある先生の対応と、野村節ともいうべき語り口に引き込まれて、つい一気に読んでしまった。それにしても、先生は発達障害や自閉症スペクトラムについて、相当お話しかったことがよくわかった。前に一度、基礎科学の教員に対して、ADHDやASDのお話をしてくださったことがあったが、「専門領域じゃないから、ちょこちょこっと準備しただけですよ」という割にはずいぶんきちんとまとまったスライドだなと感じたのはそういうわけだったのかと合点した。ADHDやASDの傾向がある学生には今でも悩まされており、先生にもっと話を聞いておけばよかったと思う。

さっそく先生にメールで読後の感想をお送りした。いただいたお返事には、「この本は初めての（多分最後の）一般読書人向けエッセイです」「法務省の施設に赴任したのは成り行きなのですが、人生はこういう偶然の積み重ねなのだなとつくづく思います」などのコメントがあった。また、近況報告に対する返事に「私には常に中村先生のサポートが得られていた」という一文があった。これは私に対する最大の賛辞であり、涙が出るほどうれしかった。でも、私が先生のために働けたのは、あくまで先生の人徳の賜物なのです……

私の趣味は週刊誌を流し読みすることだが、ある日、週刊新潮（21年10月21日号）に丸々1ページが割かれて、『刑務所の精神科医』の書評が載っているのを見つけた。大変好意的に書かれていて、我がことのようにうれしくなり、すぐに野村先生にメールした（出版元のみならず書房より私の連絡の方が早かった）。その後も、週刊文春（21年10月28日号）、サンデー毎日（21年10月31日号）と書評が掲載され、この本に対する注目度の高さを感じた。書評を見つけるたびに野村先生にメールしていたら、「このところ体調も落ち着いているので、また小澤先生と3人でお会いできればうれしい」との連絡をいただいた。一も二もなく小澤先生と日程調整して、ご自宅に伺うこととなった。まさかその日がお目にかかる最後の日になるとは思いもよらなかった。

久しぶりの3人での会話は弾み、あっという間に当初予定の1時間が過ぎてし

まった。我々は辞去しようとしたが、野村先生が「まだ大丈夫ですよ」とケーキを出してくださり、お言葉に甘えて2時間以上滞在してしまった。先生はケーキもパクッとお召し上がりになり、体調もよさそうに見えたので、これならまだまだお会いできる機会があるに違いないと思った。さすがにそろそろおいとましようとなったところ、野村先生から手を差し出された。これが野村先生との二度目の握手であった。10年前と変わらず優しく温かい手だった。

帰宅後に野村先生からいただいたメールに「50歳を過ぎて入った職場で、これほど親しい友人ができるとは思っていませんでした。幸運でした」とあった。「私などを友人と言っただけのなんて畏れ多いです」と返したところ、「欧米の映画などを観ていると、年齢に関わりなく、老人と少年でも「友人」になるのですね。日本は、少し年齢や立場が違おうとそうなりにくい。おそらく双方に何らかのこだわりが生じてしまうからでしょう。小さなことにこだわって一番大事なことを見失ってしまいがちだとしたら、残念なことだとかねがね感じていました。今後も友人としての付き合いをお願いします」とのお返事をいただいた。野村先生から友人に認定されたことは、私にとって最高の名誉である。「絶対に二度目の握手を最後にするものか、三度目四度目の握手をするんだ」と誓った。

2022年が明けてすぐ、野村先生宛に朝日新聞のオピニオン編集部からインタビュー取材依頼が来ていることを大学庶務課から聞いた。野村先生も取材を受けつつもりだと聞き、さっそく「とてもすばらしい話で、記事になるのを楽しみにしています」とメールを送った。先生からのお返事には「この本は一般読者向けで、一応社会への発信なので、こうした取材は受けていくのが筋だろうと考えています」とあった。また最後に「私の体調は「なだらかに低下」ですが、先生方が落ち着かれたら、またお会いしたいです」とあった。しかし、それは叶わないまま、このメールからわずか二週間後の1月25日にお亡くなりになった。

野村先生が亡くなられてからまもなく一年になるが、いまだに嘘のような気がする。時々無性に野村先生とお話ししたくなる。ほとんど電話をしない私の携帯の履歴には、最後にお会いした日の野村先生の履歴が残っている。この番号を押せば、また先生のあの落ち着いた声が聞けるような気がする。そして二度目の握手を思い出し、心の中で先生に語りかけている。